

信仰者の行き着くところ

(哀歌3・21〜27)

一、哀歌について

『哀歌』は、読んだだけで分かりますように詩歌、すなわち詩ですが、なぜか預言書であるエレミヤ書に次に置かれています。その理由は、キリスト教会が用いている旧約聖書の配列にあります。ヘブライ語(ヘブル語)の聖書では、旧約は、律法・預言者・諸書という三つの区分の、「諸書」に入っています。『哀歌』がエレミヤ書の次に入られている理由は、ヘブライ語聖書のギリシア語訳である七十人訳で、「哀歌」の序文に、「イスラエルの捕囚と、エルサレム崩壊後、エレミヤは泣きながら座し、エルサレムについて哀歌を歌った」と書かれているからです。ですが、そこに書かれていることは、根拠のないことであると考えられています。そもそもエレミヤ書が編集された時点で、「哀歌」がエレミヤの作であると受け止められていたら、エレミヤ書の中に集録されていたはずで

人か複数名か——書いたことは間違いないと考えられます。

キリスト教会が用いた聖書は、七十人訳の配列に沿ったために、「哀歌」がエレミヤ書の次に置かれました。また、「哀歌」という書名ですが、これは『漢訳聖書』に做ったものです。

二、人に授けられたいのち

哀歌を読みますと、暗い、重たい気持ちになるかも知れません。何せ、南国ユダがバビロン軍に滅ぼされ、神殿が破壊され、住民がバビロンの地に連れて行かれたという背景があるからです。

ですが、著者かことん暗い、重たい表現を語ることができたのは、主にあつて希望を見いだしていたからです。希望を見いだしていなかったら、悲惨なことは書けませんから。哀歌の作者たちは「私たちには主が共におられて、支えてくださっている」というところにたどり着いていたからこそ、悲惨なことも赤裸々に表現することができました。

三、神がなされる不思議

きょう与えられたテキストを見てまいります。3章20節です。〈私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む。〉とあります。3章は、1節から20節までが嘆きの詩です。

3章は嘆きから始まります。1節、2節、3節に、〈私は、主の激しい怒りのむちを受けて苦しみにあつた者。主は、私を連れ去り、光のない闇を歩ませ、御手をもって一日中、繰り返し私を攻められた。〉とあります。(ここに現れる〈私〉は、哀歌3章の作者ですが、作者は自分のことだけを語っているではありません。むしろ〈私〉は、〈主の激しい怒りのむちを受けて苦しみにあつた者〉のひとりであり、ひいては〈私〉という個人を超えて、主を神と仰ぐイスラエルの共同体です。

こうして、イスラエルの嘆きは続きます。4節、5節、6節です。〈主は、私の肉と皮をすり減らし、私の骨を砕き、私に対して陣を敷き、苦味と苦難で私を取り巻き、私を暗い所に住まわせられた。はるか昔に死んだ者のように。〉と。作者は、すなわちイスラエルは、どん底にありました。何せ、そのような状況を許されたのが主ご自身ですから。

こうして作者、すなわちイスラエルの、苦しみと悶えは続きます。7節、8節、9節です。〈主は私を囲いに入れて出られなくし、私の青銅の足かせを重くされた。私が助けを求めて叫んでも、主は私の祈りを聞き入れず、私の道を切り石で囲み、私の通り道をねじ曲げられた。〉と。この苦しみの描写が、20節まで続きます。〈私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む。〉と。

ですが、21節に不思議な回復が表れます。21節より22節の始めです。〈私はこれを心に思い返す。それゆえ、私は言う。「私は待ち望む。主の恵みを。」と。21節は、口語訳と聖書協会共同訳は、「しかし」という、原文にはないことばを補足しています。21節の聖書協会共同訳は、こうです。へしかし、そのことを心に思い返そう。それゆえ、私は待ち望む。と。「しかし」を入れることによって、作者の思いが一変したことを捉えやすくなります。

作者には、すなわちイスラエルには、自分たちが置かれている状況がどのように見えたのでしょうか。22節2行目から24節までを見てまいります。〈実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は偉大です。主こそ、私への割り当てです」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。〉とあります。

信仰とは神を信じることです。神を信頼することです。主イエス・キリストを信じ、信頼することです。神を信じますと、不思議な変化が訪れます。「大丈夫なんだ。今起こっていることは、私共の思いを超える、神の大きな御思いの中で起きていることである」と、確信できるように導かれます。そうであるなら、私共がなすべきは何かが見えてまいります。主を待ち望むことです。